

誘惑＊ボイス

プロローグ

「だからさー、そうじゃないんだよねー」

スピーカーを通して響いてきたのは、音響監督の呆れ声だった。

「すみません、もう一度演らせて下さい」

一番右端のマイクの前に立った彼は振り向き、分厚い防音ガラスの向こう側にいる音響監督に懇願する。

女性のみならず男性までもが思わず聴き入ってしまう、凛々しくも甘い声。

彼に声優としてのキャリアはまだないが、今期最も期待されているアニメのゲストキャラに抜擢されたのも納得できるほど、魅力的な声だ。

しかし、そんな彼の声に焦りが滲んでいる。

さつきからずっとこの調子だ。

何が悪かったのだろうか——と、彼は小さく息を吐く。端正な顔立ちが焦燥感で曇る。彼の切れ長の涼しげな目が、開いたままの台本に落とされた。

「抜きで録ってるんだから、一発で決めて欲しいんだけどねえ」

音響監督がため息交じりにぼやく。

『抜き』というのは、その台詞だけを個別に収録すること。

基本、こういったアニメの収録では他の声優も一緒に通して録音するのだが、何度もリテイクを受けたため、彼の台詞だけ『抜き』となったのだ。四回、いやもう五回目か。無我夢中だったので、彼はその回数をはつきりとは覚えていない。

いくら新人だとはいえ——いや、新人だからこそ現場を止めてしまうというのは、許されることではない。それは、彼自身も重々承知していた。

このシーン、彼の台詞はたった一言。

『助けてくれてありがとう！』

この一言のOKがなかなか出ない。台本はよく読んだし、前後の展開からみても台詞のニュアンスは数パターンしかないはずだ。なのに、どれで試しても違うと言われた。

その割に、細かい指示は出してこない。自分で考えろということなのだろうか？

……いや、きつと、そうじゃない。

彼は、スタジオに入る前、同行したマネージャーに聞かされた話を思い出した。

『この音響監督、舞台とか子役上がりの役者が嫌いだって話なんだよね。もしかしたらお前も難癖つけられてイビられるかもしれないから、気をつけるよ』

「まあ、マイクを通しての演技は、テレビや舞台と勝手が違うから。いきなり上手くできると思われても困るんだけどねえ」

頭の中でマネージャーの言葉が再生された直後、音響監督がわかりやすい嫌味を言っいひみて、笑い声をもらった。

なるほど。これが声の世界の洗礼というやつか——と、彼は納得する。

つまり、何をやっても、どんな演技をしても気に食わないのだ。

この音響監督は、最初から彼の演技にケチをつけるつもりだった。たった一言の演技に何度もNGを出し、リテイクを要求する。

そうして、彼が精神的に追い詰められていく様さまを楽しむ気に違いない。

マイクに向き直り、シーンの頭で止まったままの大きなモニターを横目で見つつ、周囲の様子をうかがう。

他の演者は、各々スタジオの隅に配置された丸イスに腰掛けている。彼らの反応といえば、同情的な視線を向けているか、また始まったかと肩を竦すくめているかのどちらかだった。

彼は悔しさにギリ、と歯を食いしばった。こんな理不尽なりテイクでも、仕事は仕事。……納得のいくものを提供できない自分が悪いのだと必死に言い聞かせる。

「じゃあもう一回行くとよ——はい、どうぞ」

音響監督の指示で、抜きの収録が再開される。

「——助けてくれてありがとう！」

これでどうだ。彼は調整室のほうを振り返る。

音響監督が大袈裟おおげさにため息を吐きながら、調整室側のマイクのスイッチを押すのが見えた。

……また録り直しか。いつになったらこの無限回廊から解放されるのだろう。

彼が再びマイクへ向き直ろうとした、そのとき。

「今のテイク、すぐよかったですね」

——と、スピーカーを通して知らない女性の声が聞こえてきた。

現場の人間ではない。今回の音響スタッフに女性はいなかったはずだ。だとしたら誰だ？

「あっ、出過ぎたことを言ってますみせんつ。ただ、以前のテイクよりも硬さが抜けて自然な感じになったなと思って」

調整室で若い小柄な女性が、ぺこぺこ頭を下げている。

それに応えるかのように、スタジオ内の声優陣もうんうんと大きく頷いた。

そうなってしまえば、音響監督もOKを出さないわけにはいかない。一度咳払いをしてから言う。

「今のテイク、頂きます。……じゃあ、次のシーンに行こうか」

やっと彼への執着をとき、収録を進めてくれた。

その後は大きなトラブルもなく、無事に収録は終わった。彼は挨拶のために調整室へ向かう。

音響監督に嫌味交じりの激励の言葉を掛けられたあと、彼は例の女性が自分のマネージャーと談笑していることに気付いた。

「おう、ちよつとこつち来いよ」

マネージャーに手招きされ、二人の間に入る。

「こちら、フロールイトプロの松永さん」

マネージャーは女性をそう紹介した。

「はじめまして、松永です」

柔らかな笑顔で頭を下げる女性は、彼と同じくらいの歳に見えた。

彼女は「あっ、名刺」と眩き、ぎこちない仕草で彼に名刺を渡す。

——フロールイトプロダクション マネージャー 松永ひなた

彼はすぐに、受け取った名刺に書かれた内容を目で追った。

「声優としてはこれが初めての現場だったんですね？ 先ほど植田さんから伺いました」

植田というのは彼のマネージャーの名前だ。彼は頷いた。

「でもずっと芸能系のお仕事をしていたからかな、そうとは思えないほど、すごく堂々としていらつしゃいました」

「いえ」

絶賛する松永に、彼は首を横に振って否定した。実際、音響監督の精神的攻撃はこたえたからだ。彼女の発言がなければ、もっと酷い目に遭っていたかもしれない。

「声優は心も鍛えていかないといけませんからね。ま、ある意味今回はいい経験になりましたよ」

植田がそう言い、「なっ？」と彼の肩を叩く。

彼は素直に「はい」と頷いた。ああいうタイプの人間もいるのだと知っただけでも、確かにいい経験になった。

「さすが。サンプレストさんの教育方針は勉強になります」

松永は、彼や植田の事務所の名前を出すと、感心したように大きく頷いて続ける。

「——実はわたしも、今年マネージャーになったばかりの新人なんです。まだ現場に慣れなくて、さつきみたいに余計なことを言ったりもしちゃって……なかなか難しいですね」

恥ずかしいとばかりに、松永が肩を落とした。

「あの、職種は違いますけど、新人同士お互い頑張っていきましょう！」

「……はい」

「では松永さん、僕たちはこれで失礼します。一度、事務所に戻らないと」

彼は植田に連れられて、スタジオを出た。

そして、帰りの電車の中、もらった名刺を眺めながら彼女の名前を反芻する。

——松永ひなた、か。

彼はその名前を深く心に刻んだ。

1

月曜の朝は眠い。

松永ひなた。二十五歳、独身。

童顔で、仕事のときはほぼノーメイク。服装も、動きやすい長めのカットソーとカーゴパンツにスニーカーが定番スタイルという、年頃の女子としてはちょっと残念なのが、このわたしだ。

職業はマネージャー。フロアライトプロダクションという芸能事務所で働いている。芸能事務所といっても、アーティスト部門も合わせて所属タレントが四十人に満たない小さな規模だ。

マネージャーは、わたしのほかにもう一人。二人しかいないの、と驚かれることもあるが、うちくらいの規模ならば、まあ妥当な人数なのではないだろうか。

だが、妥当とはいえ、毎週末休めるというわけではもちろんない。

所属タレントが出る舞台やイベントは土日集中しているから、そのケアに当たった週は当然ながら休み返上。一週間働き詰めなんてザラで、代休を取れる日が酷く遠く感じる。

昨日もうちの新人女性声優四人が呼ばれたイベントのケアで、一日中付きつきりだった。しかもそのイベントというのが、マイクが内蔵されている着ぐるみを声優に着せ、歌って踊らせるという、何とも珍妙なもの。

暦の上では九月でも、着ぐるみのステージはとても気を使う。パフォーマンス中の着ぐるみの温度は、尋常じゃないほど高いからだ。

休憩時間ごとに彼女たちの首や背中に冷感シートを貼って、体調を崩さないよう一日中サポートに徹した。

「声優ってそんな仕事もやるの？」と思われそうだけれど、その通り。

アニメやゲームのイメージが強いが、現実には色んなジャンルの仕事をやらされる。

新人の間は特にそうだ。うちみたいな小さな事務所なら、なおさらそういう不思議な仕事が行ってきやすい。

彼女たちも、ウサギやタヌキの着ぐるみを着て踊るために声優を志したのではなからうに……とは思っけれど、期待の大型新人でもない限り、声の仕事だけを選べないのが現状。これもステップアップのひとつとして、前向きに捉えてもらわなければ。

……いや、昨日の話はもういいとして、そんな週明けの朝。疲労困憊のわたしをイスから飛び上げさせるような知らせが、もたらされた。

「え、あの……も、もう一度仰って下さいませ、か？」

「いや、私も突然のことで何だかよくわからないんだけどね」

同じマネージャーであり、わたしの六年先輩にあたる柏木さんが半信半疑といった風が続ける。

「あの桐生玲央が——今度、フーライイトプロに移ってくるかもしれないんだって」

もう一度訊ねても、返ってくる答えは一緒だった。

「き、桐生玲央って……あの桐生玲央ですよ？」

「そう！ あのサンブレスト所属だった声優、桐生玲央だよ」

「ええっ!？」

桐生玲央といえば、数々のアニメでヒーロー役を演じた実績がある、今、最も期待されている若手男性声優だ。

表現力豊かで、声優としての実力は申し分ない。それに加えて、凛として整った顔立ちをしているので、女性を中心に絶大な人気を誇っていた。

籍を置いていたプロダクションサンブレストも、声優部門を設けている芸能事務所としては、歴史のある大手だ。

一ヶ月ほど前、桐生さんがそのサンブレストを辞めたという噂が流れ、業界内に波紋を広げていたのだけど——弱小事務所のうちに移ってくるって……

「でも、それって本当ですか？ もしかして聞き間違いとかじゃ……？」

「私もそう思って、社長に何度も確認したのよ。でも、本当みたい」

わたしよりも業界経験が豊富な柏木さんも同じ疑問を持ったらしい。四角い眼鏡のフレームを指で押さえながら首を傾げている。

「——で、まだ詳しいことはよくわからないんだけど、今日の午後には、桐生くん本人がその話をしにうちまで来るんだって」

「そ……そうなんですか」

「松永さん、午後はもともと事務所にいる予定だったよね？」

「はい、現場の予定は入ってません」

「じゃあ彼が来たら、同席よろしくね」

「わ、わかりました」

頷いて、腕時計で時間を見る。十一時過ぎか。

あと数時間もすれば、あの桐生玲央がこの事務所にやってくるのだという。しかも、移籍の話をしに。

「いやいや、まさか」と思わずにはいられない。何度も社長に確認したという柏木さんには申し訳ないけれど、やつぱり、何かの間違いなんじゃないだろうか。

ほんのちよつと前まで眠気と闘つていたというのに、完全に目が冴えてしまった。

わたしは疑う心を捨てきれないまま、約束のときを待った。



午後二時を過ぎたころ、噂の桐生玲央が事務所にやってきた。

人気声優の来訪に喜色を隠せない社長や浮き脚立つ柏木さんとともに、パーティションで区切られた応接スペースへ向かう。

「どうも、お待たせいたしました」

社長が声を掛けると、二組ある黒い長椅子の奥側に腰掛けていた男性が立ち上がった。白地のプリントTシャツの上に黒いジャケット。下はデニム。スラッとした立ち姿と、切れ長のクールな目が印象的だ。そのあまりのカッコよさに、ついじつと見入ってしまう。

「桐生玲央です。お時間を頂きましてありがとうございます」

男性はそう名乗って、まずは社長に深々と頭を下げた。

——やつぱり本物だ！

心の中で小さく叫ぶ。

作品で聴くよりも気取らない地声は、耳以上に心に響く。甘い音が印象的で心地いい。

「初めまして、フロアライトプロダクションの社長、芦川祐史と申します」

社長が前に出て、桐生さんに名刺を差し出した。

社長の芦川さんは今年で五十歳。この業界の人にしては珍しく、おおらかで優しい雰囲気纏った紳士だ。男性としては小柄で、長身の桐生さんと並ぶと頭一つ分も違って見える。

「は、初めまして。私がマネージャーの柏木圭子と——」

「松永ひなたです。よろしくお願ひします」

柏木さん、そしてわたしの順番で、同じように名刺を渡していく。

今後、彼と深くかわっていくのは、マネージャーであるわたしたち二人だ。

桐生さんは顔色一つ変えずにそれを受け取ったあと、何かに気がついた様子で「あ」ともらす。

「前の事務所を辞めてから、名刺がないんです」

その言葉に、わたしと柏木さんは思わず顔を見合わせてしまった。

前の事務所を辞めた——サンプレストを辞め、今はフリーの身だという噂は本当だったのだ。

「……あ、どうぞお掛け下さい」

社長が促すと桐生さんはもとの位置に、社長と柏木さんは彼の向かい側にそれぞれ腰を下ろした。桐生さんがガラスのテーブルの上に、今受け取った名刺を並べる。

わたしはというと、お茶の準備をするために、部屋の奥にあるウォーターサーバーへ移動した。脇にある棚からペーパーカップと紅茶のティーバッグを四人分取り出しながら、意識を長椅子のほうへ傾ける。

「えー、単刀直入に伺いますが、桐生さんは本気でうちへの移籍を考えていらつしやるということ
で宜しいのでしょうか？」

まず社長が確認とばかりに訊ねた。何だかんだいって、社長も今の今まで本気にしていなかった
という口調だ。

すると、桐生さんはあつさり「そうです」と答える。

「……あの、こんなことを申し上げるのも何なのですが、うちはサンプレストさんに比べて事務所
の規模も小さいですし、取引先や所属タレントの数も圧倒的に少ないです。何らかの事情があつて
桐生さんがサンプレストさんをお辞めになられたとして、数多ある声優事務所の中でなぜうちを選
んで下さったのか——その理由がわからず、正直に申し上げて困惑しております」

社長が、我が事務所の全員が思っているだろう疑問をストレートに投げかけた。

本当にその通りなのだ。彼がうちの事務所に移って来たとしても、今までのような華々しい仕事
を提供できるわけではない。

東京の片隅にひっそりと存在するこのフロアイトプロダクションは、声優やアーティストのマ
ネージメントの他、各種音声の制作やそのキャストイングも行っている。けれど、まだ設立して十
年と日が浅いせいとか、所属声優たちの仕事もPCゲームの声やドラマCDといった音声媒体の作品
が九割以上。一般の人が『声優』と聞いて真っ先に思い浮かべるような地上波アニメとのパイプは
ほとんどないのだ。

今までわたしが立ち会ったことのある地上波アニメはただ一つ。わたしがマネージャーになりた
ての三年前に放映されていた『ヘリオスの聖剣』だけだ。マネージャー歴四年にして一作品のみだ
なんて、その少なさがよくわかるだろう。

対するプロダクションサンプレストは都内の一等地に大きなオフィスを構える、声優界では老舗
中の老舗。アニメ、映画——外国映画の吹き替えを指す言葉だ——、その他様々な映像作品の制作
会社と繋がりを持ち、名だたる有名声優も籍を置く超有名事務所だ。その分、付属養成所から毎年
入ってくる新人の数も業界一だけど、本当に実力がある人間しか残らない。声優にとっては、厳し
い面もある。

けれど桐生さんはその競争に勝ち、こうしてすっかり自分の地位を作り上げてきたはず。

そんな彼がサンプレストを辞めてうちに移籍しても、メリットなんてないと思うのだけ……

「……フロアイトさんを選んだ理由、ですか」

彼は長くて綺麗な指を組み、少し考えてから言った。

「僕は声優の仕事を始めてからずっと、サンプレスにお世話になってました。ですので、他の事務所のこととは詳しく存じ上げないのが正直なところです。が、こちらは外でお会いする声優さん方が気持ちのいい人ばかりでした。ですから、事務所を変えて心機一転頑張っていくには、フロートさんが相応しい場所だと思いました」

そこで一旦、会話が途切れる。わたしは紅茶の入ったペーパーカップをホルダーに取り付け、シュガースティックやミルクポーションとともにトレイに載せ、テーブルに持つていく。三人に配ったあと、自分の分を持つて柏木さんの横に座った。

「なるほど。ただ、繰り返しになります。ご存知の通りうちはまだ歴史の浅い会社です。今まで桐生さんが出演なさっていたような地上波のアニメや家庭用ゲームのキャストینگはもちろんです。オーディションの情報すらもなかなか回って来ない状況です。……それでも、本当に宜しいんですか？」

「はい、承知しています」

更なる社長の問いに対しても、桐生さんは迷わずにそう返事をする。

「突然のご相談で驚かせてしまつて恐縮ですが、とにかく事務所を離れた今、一刻も早く僕のマネージメントをしてくれる新しい場所が必要なんです。……こういう方をしては何ですが、こちらに所属させて頂ければ、今僕が呼ばれている現場と繋がりが持てると思います。それはフロートさんにとって悪い話ではないはずですよ」

「そ、それはもちろんです！」

柏木さんが、鼻息荒くフライング気味に言った。

「桐生さんがうちに入つて下されば、大きな宣伝になりますし……うちの制作部も大助かりですよ。ねえ、社長？」

「ああ、そうだと。今をときめく桐生さんがうちに——なんて、何だか夢を見ているみたいな話だなあ」

それなりに固い意思を持つてやってきたらしい桐生さんに、社長も柏木さんもミーハーな女子高生みたいにキツキツと声を弾ませている。

「一両日中に正式な契約書をご用意致しますので、条件面など詳しいお話はそのときでも構いませんでしょうか？」

「はい。宜しくお願ひします」

——嘘みただいだ。

書面での契約はただけど……あの人気声優の桐生玲央が、あつという間にうちの所属になつてしまった。

柵からぼたもち、とばかりに手放して喜ぶ社長と柏木さんを横目に、わたしは疑問を感じずにはられない。何だか、妙だ。

すると、わたしが出した紅茶に、何も入れないまま口を付けた桐生さんが訊ねた。

「そういえば、フロートさんにも自社スタジオがあるんですよね？」

七階建てのこのビルの一階と二階がフロアライトのもので、二階はオフィス、一階は収録スタジオになっている。

「宜しければご覧になって行かれますか？ 今でしたら、ちょうど収録もなく空いていますので」「いいんですか？」

社長の提案に、桐生さんが嬉しそうに目を細める。

「ええ、どうぞどうぞ。——松永くん、スタジオに案内してもらってもいいかな？」

「は、はい。わかりました」

「これ、スタジオの鍵。私と柏木くんは書類を作らなきゃならないから」

社長から鍵を受け取って桐生さんに「宜しいですか？」と声を掛けると、彼は頷いて立ち上がった。

「どうぞ、ゆっくりご覧くださいね」

社長と柏木さんに見送られて、わたしと桐生さんは応接スペースを抜け、事務所の外扉を出た。

扉の向こうはすぐエレベーターが待ち構えている。わたしは逆三角形のボタンを押して、階数表示のランプを見上げた。

ランプは七のところで止まっている。このビルは古いせいか、エレベーターのスピードもとてもゆっくりだ。

わたしは、横に並んで待つ桐生さんの姿を横目で見ながら、やっぱり背が高いなあと思う。百八十センチはゆうにありそうだ。

百五十五センチに届かないわたしとしては、余計に差を感じてしまう。

それにしても、青天の霹靂（へきれき）とはこのことだ。わたしがマネージャーとして働き始めて四年目。一番驚いた出来事と言っても過言ではない。

アニメやゲームが好きなら、『CV（キャラクターボイス）…桐生玲央』という表記を必ず一度は目にしたことがあるはずだ。しかも主人公ばかりで。もちろん、過去から現在までの彼の仕事すべてを知っているわけではない。けれど、少なくともわたしが見てきた作品では、そういう役柄が多かった。

ありふれた表現だけど、彼の声には華があるのだ。絶対的なヒーロー感とでもいうか。どんなキャラクターと同じ場面に出ている、彼の台詞（せりふ）に意識を傾けてしまう……そんな魅力がある。

たとえるなら、世界を救うために旅をしている勇者とか、戦隊モノのレッドとか、そういう感じの——

「……あなたさあ」

考えごとをしていると、横にいた本人に話しかけられた。

「へっ、わたし……ですか？」

「あなた以外に誰がいるんだよ」

わたしの反応に、彼がくっくっとおかしそうに笑う。

それもそうか、とちよっと恥ずかしくなったところで、彼がわたしの顔をじっと覗きこむ。そして——

「……目の下にクマ、出来てる」

そう言いながら、わたしの右目の下まぶたを、浮かんでいるであろうクマのラインに沿って指先でなぞった。突然触れられ、おどろきのあまりその場で固まってしまふ。

昨日、イベントで一日拘束された上、打ち上げがあったから……結局終電で帰ってきたので、あんまり眠れてないんだった。

もしかして心配してくれているのかな。なんて、有名声優の気遣いに感激していたのに――

「男遊びはほどほどにしたら？」

「なっ……!!」

彼の口から放たれた言葉を聞いて我が耳を疑った。

彼が言わんとしていることを理解して、慌てて首を横に振る。

「ち、違いますっ、こ、これは、昨日イベントだったからっ」

「だろうね」

しどろもどろに否定すると、彼はあっさり頷いた。

「……?」

わたしが首を傾げると、桐生さんは形のいい眉を上げて肩を竦めた。

「だってあんた、色気ないもん」

「っ!!」

今度こそ、耳が壊れたと思った。けれど、驚きのあまり息を呑む自分の声はしっかりと聞こえて

くる。

……な、何なの？ この人、どうしてそんな失礼なことをっ……?」

「あんた、見た感じオレと同じくらい歳の差だろ。なら、歳に見合った化粧なり服装なりをしたほうがいいんじゃない？ 仕事のためにもさ」

「……………」

「あ、ほら。エレベーター来たけど？」

ようやく、上の階からエレベーターがやってきた。

「ど……ど……どっそー!」

「どーも」

こみ上げてくる怒りをぐっと堪えつつ、わたしはエレベーターの扉を押さえて桐生さんを促す。彼に続いて、わたしも乗り込んだ。

いくら彼が声優業界のスターだからって、初対面の女性に対してそういう言動はどうなんだろう。か。神経を疑う。

一階に着くと、わたしは無言のままスタジオの鍵を開ける。彼を招き入れ、明かりを点けた。

扉から入ってすぐの場所は、ウェイティングスペース。収録前後の声優さんが台本を確認したり、のんびりできるようにソファとテーブルのセットが置かれている。

自社スタジオとはいえ、いろいろな作品の収録が行われるから、外部の声優さんもよく訪れるのだ。

うちは比較的女性の声優さんが多いので、ソファは赤、テーブルは白というポップな色合いだ。脇にはウォーターサーバーやクライアントから頂いたお菓子などが置いてあり、自由に飲んだり、食べたりしてもらっている。

その向こう側が収録スタジオ。防音加工が施された分厚い扉の先には、パソコンやミキシングコンソール——複数の音をミックスして出力する機械だ——、スピーカーなどが置かれた調整室になっている。

更にその奥にある扉を開ければ収録ブースだ。四畳ほどの部屋の中央にはテーブルセットにヘッドホン、あとはカラオケにあるようなマイクよりも感度のいいコンデンサマイクがある。また、そのヘッドホンからリアルタイムに自分の声を確認する、『返し』の音量を調節するためのミキサーなどが置かれている。

「……サンブレストさんの収録スタジオに比べれば、見劣りすると思いますけど」

先ほどの怒りが冷めやらぬわたしは、精一杯の嫌味を言う。

『スタジオ』なんて大仰な言い方をしてしまうと、テレビで見るとようなシステマティックなレコーディングスタジオを想像する人が多いと思うけれど、現実にはこんな風にビルやマンションの一室を利用したスタジオも珍しくはない。桐生さんがそういった狭い場所で仕事をしたことがあるかどうかは別として。

「まあ、サンブレストのスタジオはこれの三倍は広いからな」

彼に嫌味が通用すると思ったことが間違いだった。彼は調整室と収録ブースの中を一通り見回し

てから、ウェイティングスペースに戻ってくる。

「あの、桐生さん。ひとつ訊いてもいいですか？」

「何？」

「……うちに移ってくるって、本気なんですか？」

先ほどの彼の無礼な発言が引つ掛かっていた。ああいう言い方をしたのだから、わたしもある程度彼に切りこんでも許されるような気がして、ついつい訊ねてしまう。

「本気だけど、それが？」

彼は赤いソファの上にとっかかりと腰を下ろすと、デニムを穿いた長い脚を組んでわたしを見上げた。「社長や柏木さんは喜んでるみたいですけど、サンブレストの中でも特に売れっ子だったあなたにうちに来たところで、メリットなんてありませんよ？」

「もしかして怪しいとか思ってるわけ？ 裏があるとか？」

そう言ったあとですぐに「ないない」と片手を振りながら、彼は苦笑いする。

「何か問題があつての移籍とか、そういうことはない。それは約束する」

「じゃあどうしてうちなんですか？ というより、どうしてサンブレストを辞めてしまったんですか？ あの事務所にいれば、桐生さんは前途洋々だったはずなのに」

他の大手に移るならまだしも、あえて磐石なサンブレストの看板を外して、うちに飛び込んで来る彼の気持ちがどうしても解せなかった。

彼は、感情の読めない笑みを浮かべて言う。

「それ、あなたに説明しないといけないこと？」

「いけないっていうか……わたしは、ただ——」

「別にいいじゃん。オレがフロアライトプロに移籍すれば、オレもハッピー、フロアライトプロもハッピーでウィンウィンだろ。変に勘繰る必要なんてないし、あんたもマネージャーなら素直に喜べば？」

桐生さんの言い分が間違っていないのはわかっている。

彼がこちらに移りたいと言っているのなら、歓迎するのがベストなんだろう。それは、うちの会社にとつても喜ばしいことなのだから。だけど。

「……あの、その言葉遣いはないんじゃないでしょうか」

「ん？」

「さ……さつきから失礼ですよ。わたしは『あんた』じゃなく、松永です。うちの子には、外の人間のみならず、事務所の中の人間に対してもきちんと敬意を払うように指導しています。サンブレストさんではどうだったかは存じ上げませんが、これからうちでお仕事を続けていくのであれば、そういう最低限のルールは守って頂きたいと思います」

口に出す直前まで迷ったけれど、とうとう言ってしまった。

相手が売れっ子声優なのは重々承知だし、わたしみたいなペーペーが盾突たそついていい相手じゃないのかもしれない。でも、うちの所属になる人なら話は別だ。

特別扱いはするべきじゃない——それが、わたしの仕事なんだから。

「へえ」

彼はわたしの反応を受けて、なぜかご満悦の様子だ。薄い唇が愉よろこしげに緩い弧を描く。

「なかなか言うね。——で、話は終わり？」

ちよつと感心した風に言うのと、桐生さんは全くこたえていない様子で立ち上がる。

ちやんと伝わったのだろうか？ 暖簾のれんに腕押うでおしの気分だ。

わたしは諦め気味に頷いた。

「……はい。終わりです」

……もういいや。考え方を変えよう。

声優のマネージメントはわたしと柏木さんの二人で行っているけれど、桐生さんの経歴を考えれば、わたしのような業界経験の浅い人間を仕事に同行させたりはしないだろう。今後の仕事への繋がりが他の声優の売り込みも考慮して、彼には柏木さんが専任でつくことになるに違いない。

なら、彼にとにかく言うのは柏木さんに任せて、わたしは黙っておこう。そうすれば、お互いに嫌な思いをしなくて済む。

「——そろそろ戻りましょうか。社長と柏木さんが待っています」

自分の心の中にシャッターを下ろしてしまっただけからは、楽になった。わたしは桐生さんに声を掛けて、二階の応接スペースに戻った。



「スタジオはいかがでしたか？」

応接スペースに戻ると、社長は笑顔で桐生さんに声を掛けた。

「居心地のよさそうなところですね。長時間の収録でもリラックスして臨めそうです」

「それはよかったです」

二人でスタジオについてしばらく語り合ったあと、社長は時計を確認して席を立った。

「そろそろ次の約束がありますので、私はこのあたりで失礼しますね」

「ありがとうございます」

桐生さんも立ち上がってそう言った。柏木さんやわたしも同様に席を立ち、互いに頭を下げる。

「あ、そうだ青川さん」

応接スペースから出て外扉へと手を掛けた社長を、桐生さんが呼び止める。社長はドアハンドルを握った手を離して、こちらを振り向いた。

「何でしょう？」

「まだ契約の条件など、細かくお話ししていない段階で申し訳ないんですが、僕のほうから一つお願いしたいことがあるんです」

「おや、何でしょう？」

首を傾げる社長に向かって、桐生さんは不自然なくらい、いい笑顔でこう言った。

「――松永さんを、僕の担当マネージャーにしてもらいたいんです」

2

午後十一時。右手に通勤用のトートバッグ、左手にコンビニの袋をぶら下げて、わたしはマンションのエントランスを潜った。そして、ほどなくしてやって来たエレベーターに乗り込む。

『3』と書かれたボタンを押すとランプが点灯して、扉が閉まる。

そのときふと、昼間のことが頭を過り、わたしは盛大にため息を吐いた。

『――松永さんを、僕の担当マネージャーにもらいたいんです』

驚きのあまり言葉を忘れて口を開けるわたしに、桐生さんが声優雑誌のグラビアで見せるような無邪気な笑顔を向けた。その顔がまだ強く脳裏に焼き付いている。

……何でこんなことになっちゃったんだろう。頭が追いつかないよ。

三階の三〇三号室がわたしの部屋。築二十五年というそこそこの入ったこの建物は、最寄駅から僅か二分という近さで選んだ物件だ。

北向きのため冬は寒いが、あまり日中家にいることもないので特に問題はない。それよりも駅近という要素を考えれば十分快適で、個人的には気に入っている。

扉を開けて玄関の明かりを点けると、朝、ゴミ置き場に持って行き忘れた可燃ゴミのポリ袋が鎮座していた。正確には、寝坊しかけたために運ぶ暇がなかったのだけど、意味的には大差ない。

明日は資源ゴミの日だ。仕方ない。ひとまずこのゴミ袋はベランダに運んでおこう。

室内に続く扉を身体で押し開けると、今度は照明を点けるため、扉と並ぶようにあるスイッチを肩で押す。照らし出されたのは、六畳ほどのスペースに、二畳半のキッチン。

わたしはポリ袋を抱えて、朝起きてそのままになっているベッドシートや脱ぎっ放しの洋服の山の脇を通り過ぎた。途中で、ローテールに、トートバッグとコンビニ袋を置く。

もう秋だが、カーテンは夏全開の淡いオレンジ色をしたギンガムチェックだ。それを捲り、窓を開ける。外のひんやりした空気を感じつつ、洗濯物が干しっ放しのベランダにポリ袋を置き、また窓を閉めた。本当は洗濯物を取り込んだほうがいいんだろうけれど、そこまでの気力が残っていない。今日は——いや、いつもか。

ひと仕事終えたとばかりに息を吐くと、ようやく夕食の時間だ。ローテールに戻り、トートバッグをベージュのラグに下ろしてコンビニ袋の中を開ける。今日は、イライラしていたせいかわの濃いものが食べたいと思い、ミートソースドリアにした。

コンビニでもらったお手拭きで軽く両手を拭いてから、先割れスプーンのビニールを破り、プラスチックの容器を開けてドリアを口に運ぶ。

ローテールの正面に置かれたテレビの電源を点けると、ドラマが流れた。どうやら、ラブストーリーらしい。

けれど、内容なんてちつとも頭に入って来なかった。ドリアを必要以上に咀嚼しながら考えるのは、桐生玲央のあの言葉。

『——松永さんを、僕の担当マネージャーにしてもらいたいんです』

……何で、わたしを？

まるで意味がわからない。今日初めて会ったばかりだというのに、自分の担当にするだなんて。

社長も社長だ。「それで桐生さんのモチベーションが上がるなら」なんて言って、彼のスケジュール管理を全部わたしに任せるなんて。急に決められても困ってしまう。

極めつけは、彼がわたしに最後に放ったあの一言。

『ま、せいぜいオレの足を引っ張るなよ？』

——何よ、それ。経験不足なのは自分が一番よくわかってるけど、足手まといになると思うのなら、最初から指名なんてしなきゃいいのに！

ああ、頭が痛くなってきた。うちみたいな小さな事務所に桐生玲央が移籍するっただけでも大問題なのに、このわたしが彼の担当になるなんて。そんなの、フロアライトプロに入社したときは想像もしていなかったよ。

そもそもわたしは、声優の世界にはとても疎い人間だった。

アニメもゲームも、興味が無い。日本語吹き替えの映画を劇場やDVDで見たことがあるという程度。それらを陰で支える声優という仕事を意識したことなど、一度もなかったのだ。

そんなわたしがどうしてこの業界に入ったのかというと、理由は単純。大学四年の就職活動のと

き、エントリーした企業に片っ端から『お祈りメール』——「採用は見送らせて頂きます。今後の活躍をお祈り申し上げます」というアレ——をもらい続け、最後に受けて採用されたのが、このローライトプロだったから。

そのころ、うちはようやく芸能事務所兼制作プロダクションとして回り始めた時期。それにともない声優の数を急激に増やしていて、必然的にマネージャーも増やさなければ、という流れだったらしい。

どうにかこうにか念願の採用通知をもらったわたしだったが、喜んでばかりはいられなかった。声優という職業への認識が不十分だったので、それに関する知識も当然ながらゼロ。入社後は様々なアニメやゲーム、CDや携帯アプリなど、そのとき話題になっているものにひたすら目を通し、勉強する日々だった。

マネージャーというのは、四六時中声優にはりついているわけではない。オフィスでの業務に加え、クライアントへ売り込み営業に行くのも仕事の一つだ。出社時間は普通の会社よりも少しだけ遅いが、その代わりに飲み会などが入れば午前様なんて日も珍しくない。

そんな中で業界の知識を積み重ねていくのは本当に大変だった。そうやってがむしゃらに働いて四年目。そして——

『だってあなた、色気ないもん』

『あなた、見た感じオレと同じくらいの歳だろ。なら、歳に見合った化粧なり服装なりをしたほうがいいんじゃない？ 仕事のためにもさ』

気がついたら、初対面の男性声優からあんな無礼な指摘を受けるくらい、余裕のない生活を送っていた。彼の言葉を思い出して、怒りが再燃する。

わたしはドリアを食べる手を止め、傍らに置いてあったお茶のペットボトルのキャップを捻^{ひね}り、一口含んで飲み込む。それから、ローテーブルの下に転がっていた折りたたみの鏡を拾い上げ、自分の顔を覗きこんだ。

確かに最近、仕事のときはほぼノーメイクだ。最初のころは社会人だからと気合を入れて、フルメイクを欠かさなかった。だけど、収録やイベントの付き添いで動き回るとすぐに崩れてしま^うし、童顔で、化粧をしても劇的に大人っぽくなるわけではなかったから、「化粧なしでもアリか」と、楽なほうへと流れてしまった。

洋服だってそう。当初はスタジオや営業に回るクライアントに合わせて服の雰囲気を変えたりしていた。けれど、そのうちそんな時間もなくなってしまう、動きやすさ重視のスタイルとなっていた。

昼間、桐生さんにそうされたように、下まぶたにくつきりと浮かんだクマを人差し指の先でなぞる。

桐生さんが会社を訊ねてくる前に、インターネットでプロフィールを確認したから、彼の年齢は知っている。仰る通り、わたしは彼の二つ年下だ。

「……だからってあの言い方はないよね」

こっちだって、いっぱいいっぱいなんだもの。

鏡をローテーブルの下に戻して、今度は部屋の中を見回してみる。

惨憺たる有様は、まるで泥棒に入られたみたいだ。とても年頃の女性の部屋とは思えない。それこそ、桐生さんに見られてもしたら何と言われるやら。

わかつている。こんな生活のままでは絶対によくないって。

わかつているけど……でも、どうしようもないのだ。人間にはキャパシティというものがあるって、一日の中で出来ることが限られている。

全てを上手くやるうなんて、そんなのどだい無理な話だ。何かを完璧にこなそうとしたら、何か犠牲になる。

わたしにとって今最も成さなければならないことは自分に任された仕事であり、そのために切り捨てられるものはプライベートな時間しかない。

そう自分に言い聞かせながら、前を向いてテレビの画面を見遣った。主人公と思しき男女が、愛を囁き合っている。

——恋愛かあ。

学生時代は人並みに出会いがあり、素敵だと思ふ男の人と付き合ったこともあった。

社会人になったらコミュニケーションも広がるし、出会いのチャンスはさらに増えていくだろうと思っていたが、それは大間違いだった。いや、出会いが全くないわけではないけれど、それ以上に時間がない。たとえ誰かとお付き合いしても仕事に忙殺され、長くは続かなかった。

だから、たまの休みに会う友達から、恋人や結婚の話が聞かされると、自分とはまるで別世界の

出来事のような……そう、こうしてテレビの画面を通して、物語を覗き見ているような気分になる。

『誰よりもお前を愛している。お前を幸せにできるのは世界中でたったひとり、俺だけだ』

先週、立ち会いで行った女性向け恋愛シミュレーションゲームの収録でも、似たり寄ったりなことを言っていたなあ。

愛の告白というのは、とにかく現実感がない。男性とあまり縁がないのに加え、仕事でそういう台詞を聞き慣れてしまっているからなのだろうか。

画面の中で歯の浮くような熱っぽい台詞を吐いている男性に、どこか白けた感情を抱いてしまった。わたしはテレビから意識を逸らして、再びドリアを食べ始める。

コンビニの味も違和感を覚えたのは最初だけ。今では、三食のうち二食はマンション最寄りのコンビニに頼っている。最後にキッチンに立ったのは、いつのことだろうか。すぐには思い出せない。

……考えれば考えるほど、憂鬱になってきた。わたしって、女性として終わってるよなあ。

普段は目を背けて考えないようにしていることを、わざわざ思い出させたのは桐生さんだ。本当、あの人、何なんだろう。

ムカムカした気分のまま食事を済ませると、さっそくシャワーを浴びようと立ち上がる。

明日、桐生さんが契約を結びにまた会社へやって来る。そのとき、今後の仕事の方針を含め様々な話し合いをすることになっているから、彼のプロフィールや出演情報に今一度目を通しておかなければならない。時間は効率よく使わなければ。

今日はすぐに休もうと思っていたのになあ、なんて思いつつ、それが叶わないのも慣れっこだ。

わたしはタオルや着替えを取りにもう一度ベランダへと向かった。



翌日の午後四時。正式にフロアライトプロとの契約を交わしに、桐生さんが事務所にやってきた。社長に柏木さん、そしてわたしという昨日と同じメンバーで彼を迎えて、応接スペースに移動する。

配列も昨日と同じ。奥の長椅子に桐生さんが座り、その対面に社長、柏木さん、わたしの順だ。契約書に記入と捺印なっしんをしてもらい、サンプルリストさん側にも契約違反——たとえば、事務所を辞めてすぐには他の事務所に移ってはいけないとか、個人や事務所によってはそういう細かなルールが存在する——がないことを電話で確認を入れたのち、彼は晴れてうちの所属声優となった。

桐生玲央という名前は綺麗な音の響きからてっきり芸名なのだと思っていたけれど、どうやら本名らしい。契約書にサインした名前がそのまま同じだったので、スターというのは何から何まで洗練されているのだなあ、とこっそり思った。

「これからよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

立ち上がり、改めて握手を交わす社長と桐生さん。その桐生さんが手を引つ込めると同時に、ちらりとわたしのほうを見る。

「——『松永さん』もよろしく」

わたしの名前の部分をやたら強調した言い方で、そう微笑む。

……昨日、わたしが注意したことを皮肉っているのだろうか。そりゃ、名前で呼んでくれるのはありがたいけど、いちいち癩かまわに障さわる人だ。

「……よろしく、お願いします」

精一杯の笑みを浮かべたつもりだけれど、引きつってしまったかもしれない。

契約が終われば、本題である今後についての話し合いだ。

「これから一緒にお仕事をしていくにあたり、桐生さんのほうでこうしたいとか、何か希望があれば教えて頂きたいのですが」

社長が促すと、桐生さんはハッキリとした口調でこう述べた。

「まず、アーティスト活動からは身を引きたいと思っています」

意外な申し出に、社長も柏木さんも「えっ」という表情を浮かべた。御多分にもれず、わたしもだ。

声優・桐生玲央は、アーティストとしての活動も有名だ。自らが主演を務めるアニメやゲームの主題歌や挿入歌、キャラクターソングなど、本人名義でシングル五枚、アルバム二枚をリリースしていた。

ここ一年間ではライブ活動も盛んに行っていて、集客数も上々だったはず。なのに、どうして？ わたしたち三人が同じ気持ちで桐生さんを見る。すると、彼はわたしたちを順番に見つめ返した

がら言った。

「僕は役者であって、歌手ではありません。今まではなるべく依頼された仕事は断らず、可能な限りやらせて頂くようにしていました。ですが、歌のプロではない僕がアーティストを名乗ることはもともと抵抗がありました。ですから、今後はキャラクターソング以外の歌の仕事は、極力遠慮したい——というのが、素直な気持ちです」

わかりやすく言えば「歌はその道のプロが歌えばいい」ということか。

「うーん、何だかもうたいたい気がしますけどねえ」
寂しそうに呟いたのは柏木さんだ。

そうだった。彼女はもともと声優好きが高じてマネージャー業についた人だ。桐生さんのライブに行ったという話を聞いたこともある。わたしも、柏木さんに全面的に同意だ。

桐生玲央の華は声質に限ったことではない。その容姿だって大きな魅力だ。

スラリとした長身。直線的に伸びた眉。その下の一重で切れ長の挑むような目。少し面長で陰影のある顔立ち。女性ファンの視線を釘付けにする。相当なイケメンだ。

声のイメージと実際の容姿とがなかなか噛み合わないこの世界では、期待を裏切ることのない貴重な存在だ。

他人の見た目を指摘するだけあって、自身も外見には気を遣っているらしい。トップスはダークグレーのVネックカットソーに、黒のテラードジャケット。ボトムスはグレーと白のチェックチノで、やり過ぎない程度にオシャレに纏^{まと}めている。

髪型も流行を押さえ、眉のラインで前髪を流し、サイドと襟足がタイトなショートヘアだ。色は清潔感のある黒。さつき彼の横を通ったら、整えた頭髪から香水なのかヘアワックスなのか、爽^{さわ}やかな香りがした。

楽な服を着て、伸びるままに放置してしまった髪をただ後ろで一つに纏^{まと}めているだけのわたしとはわけが違う。

そういった外見も含めて彼の売りであるならば、それを利用すればいいのにも思うのだけだ
ど……

案外真面目な部分もあるんだなあ。

「まあ、桐生さんがどうしても気が進まないというのであれば、こちらとしても無理強いはいたしません。しかし、もし考えが変わることがあったら教えて下さいね」

「わかりました。ありがとうございます」

普通の事務所の社長であれば、ここでもかなり粘るはずだ。

ところが、芦川社長はあくまで声優のモチベーションが一番という考え方なので、彼の言葉の通り、そういう無理を強^ついることはない。

「楽しいことならやったほうがいい、楽しくないことならやらなくていい」というのが彼の口癖だ。それがうちの事務所がなかなか育たない原因だったりもするのだけど、わたしはそういう考え方は嫌いじゃないし、そんな社長に付いていきたいという声優も多いから、悪くはないと思っている。

礼を言った桐生さんが、「それで」と次の話題を切り出した。

「僕がサンプルリストを急に辞めたことで、繋がりのある制作会社やスタッフは少し警戒すると思うんです。現状、次のクールからのアニメの出演予定はゼロです。まあ、円満に別れた振りをして、裏でサンプルリストが手を回しているのかもしれないが」

次のクール……つまり、十月から始まるアニメのことだ。言うならば、彼は今『干されている』状態。大手の事務所にはそんな力があるのか——と、恐ろしく思う。

「こうなることは最初から覚悟した上での移籍だったので、それは構わないんです。本当に僕の演技に価値があるならば、少し時間が空いても必ず現場に呼んでもらえると信じてますから」

怯えるわたしに反して、桐生さんはとても落ち着いていた。他人事のようだとかそういうことではなく、今の自分の立場を客観的かつ冷静に見つめている。

そしてその冷静な口調のまま、彼は続けた。

「それに僕もともと劇団出身ですし、アニメという媒体には拘とらっていません。たまたまチャンスがあったのがアニメーションだったというだけで、演技さえできれば、場所はどこだっていい。サンプルリスト時代に経験したことのないジャンルも、どんどん挑戦していきたいと思ってます」

インターネットで調べたプロフィールによると、彼は児童劇団出身の子役だったらしい。片手で数えられるくらいの歳から舞台を中心に活躍していたが、進路に迷っていた二十二歳のとき、所属していた劇団の演出家の勧めにより声優に転向したようだ。

「とはいえ、桐生さんの今までの活躍はアニメが基盤だったわけですよ。アニメの出演本数は人気がバロメーター的などころがありますし、そこは可能な限り繋げておいたほうがいいような気も

するのですが……」

柏木さんが口を挟むと、桐生さんは腕を組みながら「うーん」と小さく唸うなる。

「僕、アニメの仕事に固執する必要性は感じてないですよ。ワンクール分、決まった日、決まった時間の拘束が入るじゃないですか。そういうのが新しいチャレンジの枷かぎになるようなら、減らしてもらっても問題ないというか」

おやおや、と頭に疑問符を浮かべたのはわたしだけじゃないはずだ。

声優養成所の門戸を叩く九割以上の志望者が、アニメという媒体での活躍を夢見ているというのが——この人も不思議なことを言う。

競争の激しいこの世界で勝ち残り、一定の地位を築き上げた彼が次にすべきことは、その地盤を安定させることだ。イコール、その場所で踏ん張り続けることが目標なのだと思いますけれど、どうやらそうではないらしい。

声優さんといえど役者さん、イコール芸能人なので、よく言えば天真爛漫てんしんらんまん、悪く言えば我儘わがままで気分屋な人が多いというのはうすうす感じていた。彼の場合もそうなんだろうか。

遊びつくしたおもちやに興味を示さなくなる子供のように、もうアニメは飽きたから、違う仕事——みたいなの。

だとしたら前言を撤回しなければ。案外真面目だなんて、早とちりだったのかも。

何を考えているんだかよくわからない。こんな人のマネージメントをすることに、少し気が重くなった。

彼はそれから、当面のスケジュールが空いていること。演技が出来ない時間を作るのが何よりも嫌だから、声優業であるならNGなしでどんな仕事でも受けることを告げ、わたしたちはそれを了承した。

桐生さんくらいのポジションなら、『こういう仕事しか受けない』と壁を作ってしまうことも簡単なだけけれど、彼も今の自分が仕事を選べる立場でないことは理解しているらしい。わたしたちとしてもそのほうが仕事を振りやすいから、大変助かる。

「こちらのほうで営業が掛けられそうなどころには、資料を送って反応を見てみます。次の仕事が決まり次第、松永くんからご連絡いたしますので、しばらくお待ちください」

「はい」

芦川社長の言葉を終わりの合図として、わたしたち四人は長椅子から立ち上がった。そのとき。

「おっ疲れさまでーっす」

歌でも口ずさむかのようなテノールとともに、事務所の扉が開いた。

「あれー？ 誰もいないーい。野口さん？ 柏木さん？ 松永さん？」

野口さんというのは制作部の社員さんだ。桐生さんとの話し合いを始める前はデスクにいたはずだけれど、もしかしたら遅いランチに向かったのかもしれない。

「はい」

わたしは柏木さんに目配せをしてから応接スペースを抜けて、声の主のもとへと向かった。顔を見なくても、この軽薄な口調で誰なのかは想像がつく。

わざとらしく額の上に手のひらを当て、誰かを探すようなジェスチャーをしていたのは近衛雅臣。フロアライトプロのアーティスト部門に籍を置く歌手だ。

「ごめんね、今お客さまがいらしてて——どうしたの？」

いや、正確に言えばもうお客さまではないのだけど、いちいち説明するのも面倒だ。説明を適当に切り上げ、用件を訊ねる。

「あ、松永さん！ お疲れさまでーっす」

近衛くんはわたしの顔を見た途端、そう言って笑みを浮かべた。そして、アッシュグレーに染めた、くせ毛風の柔らかそうなパーマヘアを手で撫でつけながら言う。

「んーと、七月にオープニング楽曲を歌ったゲームの製品が届いたって連絡を柏木さんからもらったんでー、取りに来たんですけど……」

「ゲーム？ 何てタイトルです？」

指先で弄っていた毛先をピンと弾きながら、彼が小さく唸る。

「……えーと、何だったかな……『虹の——』……いや、違うな。『虹は——』……ううん、その、虹が光ってどーたらこーたらみたいなの」

「……はあ」

呆れてため息がもれる。

自分がかかわった作品名くらい覚えておいてほしい。というか、レコーディングしたなら覚えているはずでしょうと突っ込みたくなる。けれど、常にとぼけているみたいなの近衛くんにも無

駄だと思って、口を嚙んだ。

「ちよっと待っててくださいね」

おそらくアレだろうという製品が思い当たった。わたしは、オフィス奥にある野口さんのデスクを見に行く。そして、書類や収録台本などの脇に無造作に積んであるゲームの山を調べた。

……あった、これだ。

わたしはあるPCゲームのパッケージを選んで手に取り、再び彼の前に戻った。

「これじゃない？」

「そーそ、コレ！『七色の虹が輝くとき』！」

近衛くんはわたしが差し出したゲームを見て、「思い出した」とでも言うように小さく叫んだ。淡いブルーのパッケージには、学生服らしきコスチュームに身を包んだ二次元の男の子たちが七人並んでいる。

これは、主人公の女の子と、ここに描かれているいずれかの男の子との恋愛物語を楽しむ、女性向け恋愛シミュレーションゲーム——俗に言う乙女ゲームというやつだ。男性キャラはもちろん女性キャラもフルボイス仕様。確か専門誌での紹介によると、現代ファンタジーの学園モノだったはず。

気前がいいメーカーさんだと、こうしてキャストや歌い手ひとりひとりに完成品を送ってくれたりする。

自分が携わった作品の完成品を見るのはやはり嬉しいのだろう、近衛くんはご機嫌な様子で、い

そいそと自分のバッグにしまっていた。

「どう？ これ、売れそう？」

ブランドモチーフのプリントが賑やかなヴィヴィアンのポストンバッグのジッパーを閉めながら、近衛くんが少し声を潜めた。

「どうですかね。でも結構大きいメーカーさんだし、そこそこ売れるんじゃないかと思いますが」

「だといいなー。ほら、何千本売れると第二弾が出るとかってあるじゃん。そしたら、また使ってもらえるかなーってさ」

「じゃあ、そうなるようにブログとかツイッターで宣伝よろしくお願いしますね、近衛くん」

「わかってるってー」

任せておけどでも言うように、彼が自分の胸を叩いた。

「……近衛？」

わたしが近衛くんとそんなやりとりをしていると、応接スペースのほうから怪訝そうな声が聞こえてきた。桐生さんだ。

「あれ、その声……」

近衛くんも何かに気がついた様子で、応接スペースのパーティションの中をそっと覗く。そしてそこに桐生さんの姿を見つけると、彼はぴよんと中に足を踏み出して歓声を上げた。わたしもそちらへと移動する。

「えっ、玲央じゃん！ すげー久しぶりー！」

「珍しい苗字だと思ったらやつぱりお前か」

桐生さんもやや驚いた様子で立ち上がり、それからワントンポ遅れて小さく微笑む。

「近衛、何してるんだ？」

「僕さあ、今ここで歌の仕事してるんだよねー。そう言う玲央はどうしたの、収録？」
どうやら二人は知り合いのようだ。

桐生さんは「いや」と首を横に振って答える。

「てことは、またお前と一緒になのか」

「え？」

きよんとする近衛くん。

「——桐生さんは、先ほど正式にフロアライトプロ所属になったんだよ」

「あつ、社長と柏木さんっ、お疲れさます——って、えええー!？」

手前に居た二人の存在にいまさら気がついたらしい。

近衛くんはわざとらしいほどに明るい声で挨拶をしてから、社長の言葉に身体をのけ反らせて驚く。

「何それ、マジ？ だって玲央、天下のサンブレストで頑張ってたんじゃ……」

「ひと月前まではな」

「えー、そうなの？ 超びっくりしたわー……なら噂は本当だったんだな」

「噂？」

桐生さんが怪訝そうに訊ねる。

「いや、玲央がサンブレストを辞めたかもって話を、ウチの声優から聞いたことがあったんだよ」

「あの、桐生さんと近衛くんはどういう知り合いなんですか？」

意外な二人の接点が気になって訊ねてみる。すると、彼らは顔を見合わせた。

「ああ、僕と玲央は昔、同じ児童劇団にいたんですよー。僕はミュージカル中心で玲央は現代劇が多かったから、あんまり仕事は被らなかつたんですけど、仲はよくて——なあ？」

答えたのは近衛くん。同意を求めるように桐生さんに訊ねる。

「悪くはなかった」

「素直じゃねーなあ。よく稽古場から一緒に帰った仲じゃーん？」

「それはお前がオレのあとをしつこくくっついてきてたからだよ」

「一緒に帰ったことには変わりないだろうが」

口を尖らせる近衛くんの顔を見て、おかしそうに笑う桐生さん。口ではそんなことを言いながら、やはり親しかったようだ。

そういえば近衛くんも子役出身だったんだっけ。近衛くんの担当は柏木さんなので、わたしは彼の経歴に関してはあまり詳しくない。

「いやー、まさかまた玲央と同じ拠点で仕事することになるとはね。期待してるぜ」

「何をだよ」

「仕事に決まってるだろうー。アニメにゲームに引つ張りだこのお前がいれば、うちの事務所も潤

うってわけだよ。お前きつかけの案件で何か歌わせてもらええることもあるかもしれない」

近衛くんも、色んな意味で桐生さんの移籍を歓迎しているようだった。近衛くんが組んだ両手を後頭部に回して、天井を仰ぐ。

「でもサンブレストがよく売れっ子的のお前を手放したよな。何かやったの？」

「そんなんじゃない」

「えー、気になるなあ。絶対何かあったんだろー」

まるで小学生の女子が友達に好きな人を訊ねるみたいな口調の近衛くんを、「さあな」とかわす桐生さん。何かあったとも何もなかったとも取れる表情をしていた。

「――ま、いいや。込み入った話なら帰り道でいくらでも聞くぜ？ 僕、今日は製品を受け取りに来ただけだから、暇なんだ」

「オレは暇だなんて一言も言ってないだろ」

「そう言わずにー。久々の再会なんだからさ、どっかその辺で茶ーでもしてこうぜ。お前の用事も終わりだろ？」

「……………」

桐生さんはわたしや柏木さん、そして社長に視線で訊ねた。社長は垂れ目の瞳を細め、頷きながら二人に言う。

「私たちの話もう済みましたから、どうぞ行ってらっしゃい」

「よしっ。社長からの許可も出たし、行こうぜ。――それじゃ、お疲れさまでしたー！」

「おい、近衛っ……………」

近衛くんはガッツポーズをすると、悪戯いたづらっ子みたいに駆け足で事務所を出て行った。

「――全く、オレを置いて行ってどうするんだよ、アイツは。…………お疲れさまでした。今日はこれで失礼します」

残された桐生さんはやれやれと困ったような口調でぼやいた。そして、扉の向こうにいるだろう近衛くんの様子を気にしながら、長椅子の横に置いていたバッグを拾い上げて、頭を下げる。

社長と柏木さんが「お疲れさまです」と言うのに倣まねって、わたしも同じ挨拶を返しながら、内心で少しホッとしていた。

昨日のエレベーター前での発言により、桐生さんつてもっと傍若無人ぼうじやくふじんな性格なのかと思っていた。でも、こうして近衛くんに翻弄ほんろうされているところを見ると、案外親しみやすい部分も持ち合わせているのかも、と。

ビジネスパートナーとして、これから彼とどうやって良好な関係を構築していけばいいか、悩ましかつたけれど、あんまり考えすぎないほうがいいのかな。

なんて思った直後。去り際の桐生さんが、気を抜いていたわたしの耳元でこう囁ささやいた。

「――次に現場で会うときは、化粧と服、な？ よろしく」

「…………っ！」

「じゃ」と手を上げて出ていく彼は、悪戯いたづらっぼく笑っていた。

ううう。やっぱりこの人、苦手かも…………

晴れたと思つた矢先に、また不安という名の霧がもやもやと立ち込める。

「あら松永さん、もう桐生くんと打ち解けたの？」

「相性がいいようで、よかったですねえ」

わたしと彼のやりとり——というか、彼が一方的に言い逃げしていただけなだけ——の、どこをどう解釈したらそういう判断になるのか。社長と柏木さんは微笑ましいとばかりに、うんうんと頷いている。

「……そ、そうだといいんですけど」

わたしは乾いた笑い声をもらすことしかできなかった。

3

突然大手を辞めたワケあり声優とはいえ、それでも桐生玲央を使いたいというクライアントはすぐに見つかった。

彼と所属契約を交わしてから一週間も経たないうちに、わたしは桐生さんのフロアライトプロでの初めての収録に同行することとなった。

時間は午後五時から。場所は、都内近郊にあるブルーリーフスタジオ。関係者の間では通称「青スタ」と呼ばれていて、歌のレコーディングからラジオ収録まで様々な用途で使われるスタジオだ。

最寄りの地下鉄駅から青スタまでは、十分もかからない。

うちでは所属声優たちに、収録時間の十五分前までにはスタジオに入ってもらうようにしている。なので、桐生さんとは四時半に駅の改札で待ち合わせをすることにした。

わたしは他の声優の収録現場から直接駅に向かったので、約束の時間の十分前に到着してしまつた。

わかりやすいように、案内版の前で彼の到着を待とうか——と、改札を出たところで、

「おい、こっち」

と、右側に並ぶ券売機のあたりから、ぶっきらぼうに声を掛けられる。目を向けると、マスクをした桐生さんがいた。

声優はその名の通り声が命。乾燥する季節の外出時、彼らは常にマスクをしている。

「あ、桐生さん。もう着いてたんですね」

なぜかと問われると特に理由はないけれど、なんとなく彼は定刻ギリギリにやってきそうな気がしていた。かなり時間に余裕を持って現れた彼に感心し、そう明るく声を掛ける。

「着いてたんですね、じゃないだろ」

「……？」

券売機を背に腕を組む桐生さんの眉間に、皺よぼが寄っている。

何だろう。あまり機嫌が宜しくないようだ。今の発言に、彼の神経を苛立たせるようなワードが含まれていたのだろうか。

「——あのさ、オレが言ったこと、全然理解してないだろ？」

「な、何がですか？」

「説明しなきゃわかんない？」

わからない——と答えたいけれど、そうはいかない雰囲気だ。首を傾げる桐生さんの、苛立ちと呆れが半々ずつくらい表情を見つめて、必死に正解を探す。

「化粧。服。……次はちゃんとして来いって言っただろ？」

「——あつ」

そうだった。

指摘されて憤っていたのはつい最近だったはずなのに。

慌ただしい日常の波に流され、あつという間に記憶の彼方だった。

「あつ、あの、このところ他の子の収録の同行や飲み会が続いて、それで……」

「言い訳はいい」

小さく息を吐いたあと、彼は首を横に振って続ける。

「別にあんたがどう思われようと構わないよ。オレはさ、あんたがキツチリしてないことでオレが損するかもしれないってことを気にしてるの」

「べ、別に桐生さんは——」

「関係ないと思う？ でも、クライアントやスタジオの人間って結構そういうところまで見てるもんだよ。あんだだつて逆の立場で考えたらわかると思うけど、未長く仕事を任せるとしたら、社会

人としての礼節をわきまえてる人間のほうがいいだろ？ そういうこと」

「……………」

「そんなことを言われても」と言い返したくなるけれど、堪える。

わたしが担当している声優は彼だけではない。収録の同行が増えれば、その分残業してオフィスでの業務をこなさなければならなくなる。今週は本当に忙しくて、申し訳ないけれどそこまで手が回らなかったのが実情だ。

けれど、桐生さんにそれを言っても伝わらないだろう。彼は声優で、わたしはスタッフ。立場が違えば、考え方や優先順位も違う。

「つ、次からは……気をつけます」

自分自身も、決してこれではよしとは思っていない。

——だからだろうか。いつもの機能性重視だけどシンプルすぎるスタイルが急に恥ずかしくなってきた。

素直に謝ると、彼はあつさり納得したのか、「ん」とだけ言って、出口の階段へ歩き始めた。



初っ端でいきなり桐生さんに注意を受け、この先はどうなることかと思っただけれど、そこはやはりプロ。

「おはようございます。今日は宜しくお願います！」

収録の二十分以上前に現場である青スタに到着し、外扉を潜ると、彼はそれまでわたしに見せることのなかったにこやかな笑顔で、エンジニアさんに挨拶をする。

「おー、玲央。久しぶりだな」

「ご無沙汰します、和久井さん。また呼んでもらえて嬉しいです」

「いやいや。急だったし、逆にごめん」

青スタの責任者であり、今回のディレクター兼エンジニアの和久井さんは、大柄で、口元や顎に無精ひげを蓄えた、一見強面風の男性。音響制作の仕事に携わる前は、ジャズバンドのドラマーをやっていたらしい。

この青スタでは主にPCゲームやドラマCDの収録が多い。

わたしがマネージャーとして働き始めたばかりのときは、音楽畑の人がアニメや映像といった案件を扱うのは不思議な気がしていた。けれど、他のスタジオにも顔を出すにつれ、ミュージシャンからエンジニアに転向するパターンはそんなに珍しくないことに気づく。

というのも、ミュージシャンは耳がいいのだ。同じ場所で聞いているわたしが気づかないくらいの、些細なリップノイズや鼻の鳴りにすぐ反応し、リテイク指示を出している。だから、声を扱う仕事にとっても向いているのだ。

親しげな雰囲気から察するに、どうやら桐生さんは過去に和久井さんと仕事をしたことがあるらしい。

彼はウエイティングスペースのソファにバッグを置くと、その中から台本とミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。

スタジオと名のつくところのほとんどにウォーターサーバーが設置されているけれど、彼は水を持ち歩いているらしい。

声優によつては、このメーカーの水だと上手く口が回るとか、逆に回らないとかがあるみたいだ。おそらく軟水とか硬水とか、そういうのが関係しているんだと思う。

「——しかし、玲央がこういう案件を引き受けてくれるとは思わなかったからさ。こっちとしてもすぐくありがたいよ」

和久井さんが心底助かったという風に顔を綻ばせる。

実際、依頼から収録までがこんなに近いのは稀だ。それだけ急ぎの内容だったのだろう。

そして「こういう案件」とは、今回の台本を指している。

これから収録するのは、女性向けの作品。

おおまかな筋書きはこうだ。

さる王国の姫君は、隣国の王子と婚約を結んでいる。けれど、それは国のための政略結婚というやつで、実は姫君には他に想い人がいた。

その想い人を演じるのが桐生さん。彼女に仕える騎士役だ。騎士もまた同様に、姫君のことを愛おしく思っていた。けれど、一国の姫と騎士では身分が違うため、お互い気持ちを打ち明けることができない。

翌日には、姫君は生まれ育った祖国を離れて嫁いでしまう。姫君を諦めきれない騎士は、その夜、姫君の褥を訪れ、その純潔を奪う——という物語。

端的に言ってしまうえば、台詞の八割が濡れ場だ。聴き手が『姫君』の立場となり、耳だけで、そういうドラマチックかつエロチックなシーンを体感するのだ。商品化された際、十八歳未満は当然購入できない。

「こういう仕事、やったことないだろ？」

和久井さんが訊ねる。アニメの世界で活躍している人は、こういった仕事を敬遠することが多いけれど、先日事務所で台本を受け取り一読した桐生さんは、好奇心に目を輝かせていた。

「初めてですけど、まあ見て下さいよ。ちゃんと期待にはお応えするんで」

「お、言ったな。じゃ、早速お手並み拝見といくか。準備しな」

自信ありげに桐生さんが答えると、和久井さんはガハハと笑って、収録ブースへと続く扉を指差した。

青スタはウェイティングスペースの中に調整室がある。ミキサーが置いてあるデスクと収録ブースの間は透明の防音ガラスで隔てられていて、ウェイティングスペースから収録ブースの中を見られるようになっていたのだ。

「はい」

桐生さんは返事をする、台本やミネラルウォーターを持って、小窓がついている分厚い扉を開ける。そして、防音ガラスの中にあるテーブルセットに座ると、台本の最終チェックに入った。

弾む二人の会話に区切りがついたのを見計らい、今度はわたしが和久井さんに挨拶をする。

「本日はどうぞ宜しくお願いします」

「おー、松永ちゃん。ごめんねー、何だか慌ただしくて」

収録に備え、彼もミキサーの前の椅子に腰掛けながら言う。

「いえ。ご連絡してからすぐにお仕事が頂けて、桐生本人も喜んでました」

「しかしフロアライトさんにとってはラッキーだったね、玲央を引き抜くなんてさ。どんな手使ったの？」

「ひ、引き抜いたりなんてしてませんよー。うちにそんな力ないですっ」

しかも天下のサンブレストから——そんなことしたら酷いしっぺ返しに遭いそうだ。わたしはぶんぶん両手を振った。

「うちとしても、何が何だかわからない状態でして……」

「へえ、そうなの」

「でも、桐生さんが何かを求めてうちに来てくれたなら、それに応えて全力でサポートして行くって、他のスタッフとも話しているところですよ」

彼の声は多くの人に認められ、愛されている。今フロアライトが彼のために出来ることは、サンブレスト時代とまではいかなくても、なるべく多く、彼が演じられる機会を与えることだ。それは、社長や柏木さんと誓ったことでもある。

「なるほどね。……まあ、こういう感じの仕事でよければうちから回せるからさ。クライアントも

喜ぶしね」

「ありがとうございます。今後とも宜しくお願ひします」

わたしは改めて和久井さんに頭を下げた。

「じゃ、まあぼちぼち始めますかね。玲央、準備はいいか？」

「はい、いつでも大丈夫です。……今日は、クライアントさんはいらっしやらないんですか？」

トークバックボタンを押して和久井さんが桐生さんに呼びかけると、スピーカーから彼の声が返ってきた。

収録ブースは当然ながら余計な音が入らないようになっていて、ディレクションなどで意思疎通をするときには、その都度こうしてこのボタンを押し、連絡用の出力をオンにする必要がある。

「地方のクライアントだから、立ち会いなしだ。キャストがお前だって伝えたら驚いてたぜ。『桐生さんなら間違いないでしょうから、彼にお任せします』だと。『キャストが桐生さんだって知ってたら、立ち会いに行つてたのに』とも言つてた。お前、相変わらず人気だな」

「それはそれでプレッシャーかも」

「どこがだよ。まっ、リラックスしてやつてくれよ」

プレッシャーなど微塵も感じていなさそうな桐生さんの口ぶりに、和久井さんがまたガハハと豪快に笑つた。

そろそろ収録が始まる。わたしもソファに座らせてもらい、録音を見守ることにする。

「まず、キャラチェックからだな」

キャラチェックとは、役と声があつているかを確認する作業だ。クライアントがいる場合や、合つていないと思つた場合には、ここでリクエストをして声を決める。

「最初の三、四個、台詞を読んでもらえるか？」

「わかりました」

「じゃ、お願ひします」

和久井さんがそう言つてCUEを出すと、防音ガラス越しの桐生さんの顔つきが変わつた。台本を見下ろす目が、よく切れる剃刀のように鋭く光る。

『姫。起きて下さい、姫』

テーブルの中央に置かれたコンデンサマイクを通して聞く桐生さんの声は、彼のものであり、同時に彼のものではなかった。

彼の演技を生で耳にするのは初めてだ。甘く、優しく、心に響く素敵な声。思わず目を閉じて聞き入る。

『驚かれるのも無理はありません。しかし、どうか怖がらないで』

『ご無礼は承知の上——私は、どうしても貴女にお伝えしたいことがあつて参りました』

「……問題ないな。レベル合わせるからちょっと待つてくれ」

再びトークバックボタンを押して、和久井さんが言う。複数の声優がかかわる場合、予め収録してある彼らの音量と合わせる必要がある。

この作品はオムニバス形式。一本四十五分程度の物語を、桐生さんを含め五人の男性声優が演じるのだ。

やはり桐生さんは格が違う。本物だ——と思う。

台詞だけで、姫君を守る騎士の姿が想像できた。声を作り、何となくの雰囲気醸し出せる人は多々いるけれど、ちゃんとキャラクターとして呼吸をし、存在していることを感じられる演技ができる声優はごく僅かだ。桐生さんはその僅かの中に、間違いない入っている。

「OK、じゃあ録っていくか。…何か問題がない限りこっちは止めないから、お前のペースで読んでいってくれ。いいな？」

「わかりました」

マイクの横に置いたペットボトルの水を一口含んで、桐生さんが頷く。

作品の性質上、全編が桐生さんのひとり芝居。こういう場合、エンジニアは録音を回しつつ放しにして、声優は台詞を纏まりごとに区切って読む。その間に生じてしまった不要な間や音は、あとの編集の段階で切っていくのだ。

「よし、行くぞ…はい、どうぞ」

収録が本格的にスタートした合図。

『姫。起きて下さい、姫』

『驚かれるのも無理はありません。しかし、どうか怖がらないで』

『ご無礼は承知の上——私は、どうしても貴女にお伝えしたいことがあって参りました』

『私は…ずっと、姫のことをお慕いしておりました』

計ったかのような一定の間隔をあげ、テンポよく演じていく桐生さん。

こういった単独での収録は、アニメと違って掛け合いがない分、台詞を読んでもしょうというか、どうしても平坦になりがちなのだけれど、彼は至ってナチュラルに、感情豊かに表現していると思う。

「さすがは桐生玲央だな」

「…はこ」

感心した様子の和久井さんに、頷きを返す。

児童劇団でかなり鍛えられてみたいだから、基礎がしっかりと出来ているのだろう。ただ声がいいだけだったり、付け焼刃だとこうはいかない。彼の人気はきちんと実力に裏打ちされているものなのだ、改めて知った。

『愛しい姫。他の男のものになるなど…少し想像するだけでも、頭がおかしくなってしまうそうです』

『明日には引き裂かれてしまうのなら、貴女の身も心も奪ってしまいたい。それが、許されぬことだとしても…』

声優としての彼の仕事っぷりを目の当たりにし、胸を打たれているうちにもシナリオは進んでいく。姫君も、騎士への秘めたる想いを打ち明け——次第に、場面は煽情的なシーンへと移行していく。

マナージャーになって初めてこういう収録に立ち会ったときは、本当にビックリした。そのときは男性向けゲームの台本だったのだけれど、そういうシーンに入った途端、普通の生活をしていたら絶対に聞く機会のないような卑猥な単語や文章が書かれていて——それなりの覚悟をして行ったにもかかわらず、とにかく衝撃的だった。

とはいえ、わたしは女性声優の立ち会いをすることが多いから、それから何度も男性向け作品の収録に行くことになった。結果、そういった現場に慣れてしまったのだけれど——今回は男性声優の現場。女性向けの十八禁作品の収録に同行するのは、初めてだ。何だか新鮮に感じる。

『さあ、姫。瞳を閉じて——私に全てを委ねて』

ちゅっ。軽いキスの音が入る。

現場に入るまで、こういう音さえも声優さん自らが演じているとは知らなかった。手の甲に自分の唇をあてるなどして音を出している。

『可愛い。貴女の桜色の唇……柔らかいです』

ちゅ——ちゅく——

甘く優しい美声の合間に響く小さな破裂音にドキドキする。目を閉じているわたしは、何だか物語の中の姫君にでもなったような気分だ。彼の囁きに意識を集中させる。

『そう。ゆっくり舌を絡めてみて——上手、ですね』

ちゅっ、ぴちゅ。ちゅっ——

破裂音が次第に粘着性を帯びてくる。深く唇を重ねているのだ。

舌と舌を重ねて、絡めて、擦り合わせて。口腔内を犯していく音。

『ふふ、息を乱している貴女の顔、とてもそそられます』

『もっとよく見せて——私の顔を、見つめて』

切れ長で、挑むような強い意思を持った桐生さんの目を思い出す。

あの瞳に見つめられていると思うと、それだけで鼓動が速くなった。

『貴女の心臓の音、よく聞こえますよ』

『……緊張、しているのですか？ 私と同じです。ほら……私の胸に触れてみて下さい』

彼に導かれ、その胸板に触れたような気がした。温かな感触とともに、早鐘を打つ心臓。

『わかったでしょう？ もっとと貴女に触れたい。もっと……貴女を感じたい』

愛おしさが募り、切迫した彼の様子が目に浮かぶ。

『綺麗な肌だ……まるで、白磁のように透き通っていて、艶やかで——全身に、キスしたくなる』

ちゅっ……ちゅ——

また、破裂音。首筋に、鎖骨に、口付けを落とされたような錯覚。

『この二つの膨らみも、私のものです』

ちゅうっ……ちゅっ——

今度のもっと吸いつくような、少し強い音が響いた。きつと印を付けられたのだ。騎士のものであるという、印を。

『おや、姫。……胸元をご覧下さい』